聴覚障害者の相談支援について

四天王寺大学　原　順子

2022年3月12日（土）熊本市：水前寺共済会館

研究領域

＊障害者福祉
＊ソーシャルワーク

障害者ソーシャルワーク

◦聴覚障害ソーシャルワークの専門性

生活上の問題を抱えておられる聴覚障害者の方への
ソーシャルワークについて

内容

Ⅰ．聴覚障害ソーシャルワークの枠組み

Ⅱ．聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンス

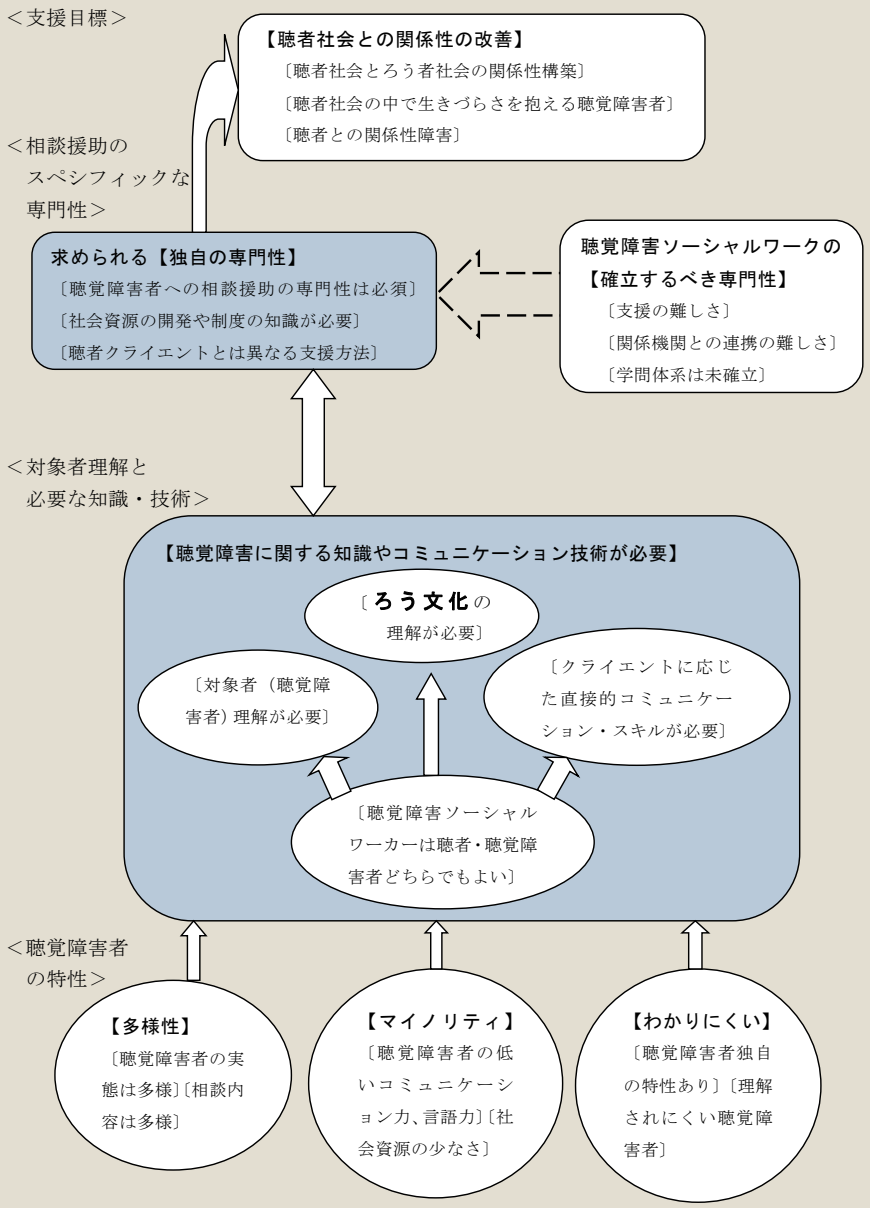
Ⅲ．文化モデルアプローチの重要性

Ⅳ．アンケート調査結果から

Ⅰ．聴覚障害ソーシャルワークの枠組み

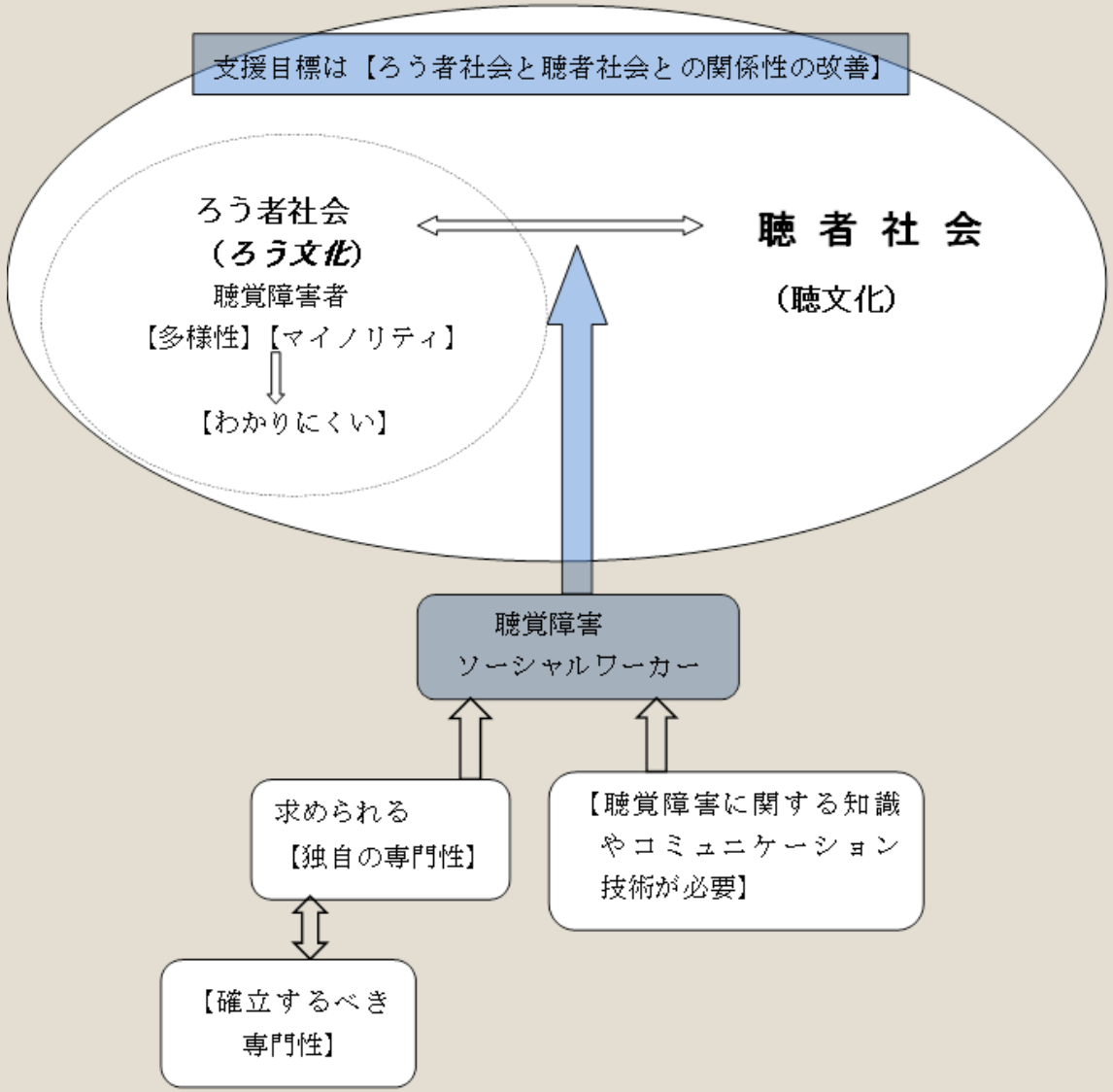
＊質的調査（インタビュー調査）実施

- 研究協力者：聴覚障害者への相談支援の職務経験がある13名
- インタビュー面接：半構成的面接法
- 実施期間：2010年12月～2011年2月
- 面接時間：1時間30分から2時間
- 研究における倫理的配慮：　省略
- 分析方法：M-GTA
  （修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）



【　】はカテゴリー、〔　〕は概念を示す。

（図 1）聴覚障害者の特性を考慮した聴覚障害ソーシャルワークの枠組み



（図 2）聴覚障害者へのソーシャルワークの理論的枠組み

聴覚障害ソーシャルワークとは

１）聴覚障害者のクライエントは、多数派の聴者社会の中ではマイノリティであり、その実態は多様であるために**理解されにくい・誤解されやすい存在**である。

２）聴覚障害ソーシャルワーカーには、聴覚障害に関する知識やコミュニケーション技術といった**独自の専門性が必要**である。

３）クライエントへの支援目標は個々のニーズ解決であるが、それらは総じて、多数派の聴者社会と少数派のろう者社会との関係性において生じる、さまざまな生活上の諸問題の解決といった**関係性の改善**である。

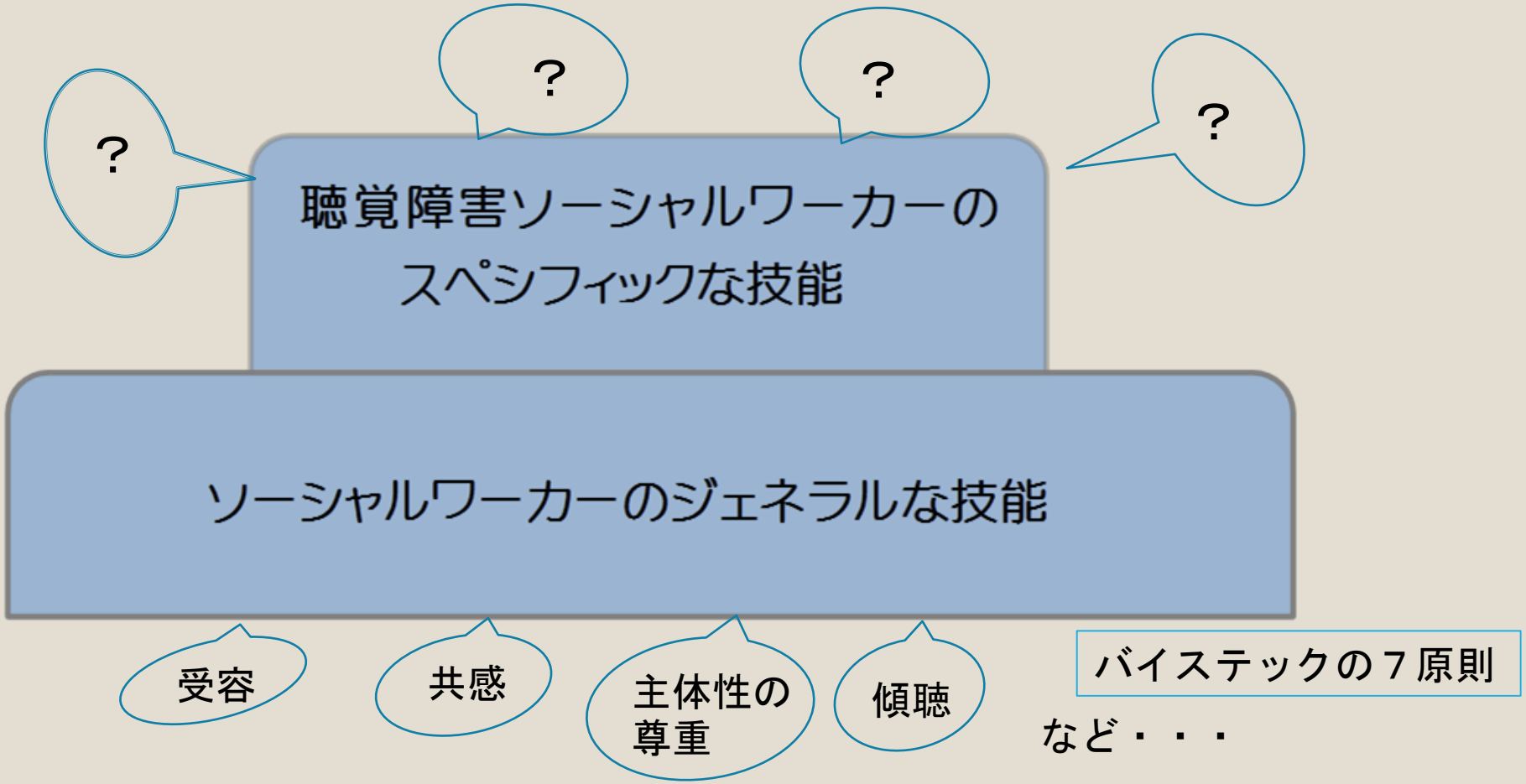
Ⅱ．聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンス

- コンピテンス　(Competence)

　　＝ 専門職として必要な行動や活動
　　を遂行する総合的な能力、力量

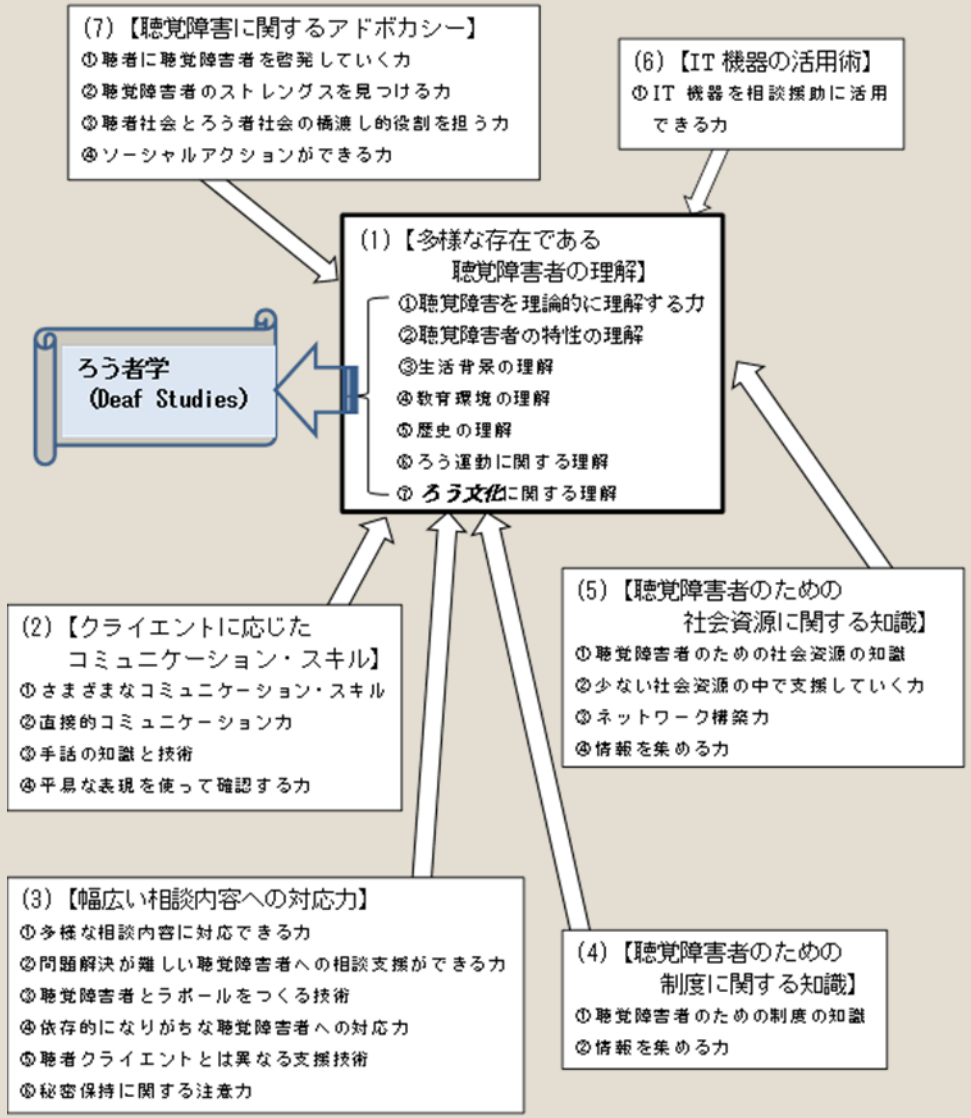
　　＝専門的資質、知識、技能

聴覚障害ソーシャルワーカーの
スペシフィックな技能のとらえ方



＊質的調査（インタビュー調査）実施

- 研究協力者：聴覚障害者への相談支援の職務経験がある18名
- インタビュー面接：半構成的面接法
- 実施期間：2010年12月～2012年2月
- 面接時間：1時間30分から2時間
- 研究における倫理的配慮：　省略
- 分析方法：ＫＪ法



（図 3）聴覚障害ソーシャルワーカーのコンピテンス概念図

ろう者学
（Ｄｅａｆ　Ｓｔｕｄｉｅｓ）

（１）【多様な存在である
聴覚障害者の理解】

①聴覚障害を理論的に理解する力
②聴覚障害者の特性の理解
③生活背景の理解
④教育環境の理解
⑤歴史の理解
⑥ろう運動に関する理解
⑦ろう文化に関する理解

ろう者学の内容

①聞こえに関する医学的、音響学的理解

（残存聴力、失聴時期などの個別的理解）

②コミュニケーションに関する理解

（手話、口話、筆談、身振り、トータルコミュニケーションなど）

③ろう教育に関する理解

④ろう文化に関する理解

（Cross-Cultural Practice視点の重要性）

⑤就労・雇用に関する理解

⑥聴覚障害児・者の歴史に関する理解

⑦高齢聴覚障害者や重複聴覚障害児・者に関する理解

ろう者学（Deaf Studies）の講義内容

＊聞こえのしくみ
＊ろう文化
＊手話学
＊言語学とコミュニケーション
＊ろう者の社会学
＊デフコミュニティ
＊ろう運動
＊ろう者の歴史
＊ろう教育
＊手話通訳
＊ろう者の心理学
＊ろう文学
＊制度や法律

【講義科目名】

＊デフコミュニティの歴史的文化的背景
＊聴者社会で生きるろう者への視点
＊ろう者の人間としての尊厳と生活の質ＱＯＬの向上
＊バイリンガル・バイカルチュアの課題
＊人工内耳埋込手術
＊ろう者の未来
＊ろう者の権利
＊ろう者への福祉的施策など

【各論的な科目名】

（２）【クライエントに応じた　コミュニケーション・スキル】

①さまざまなコミュニケーション・スキル
②直接的コミュニケーション力
③手話の知識と技術
④平易な表現を使って確認する力

（３）【幅広い相談内容への対応力】

①多様な相談内容に対応できる力
②問題解決が難しい聴覚障害者への相談支援ができる力
③聴覚障害者とラポールをつくる技術
④依存的になりがちな聴覚障害者への対応力
⑤聴者クライエントとは異なる支援技術
⑥秘密保持に関する注意力

(4)【聴覚障害者のための制度に関する知識】

①聴覚障害者のための制度の知識

②情報を集める力

(5)【聴覚障害者のための社会資源に関する知識】

①聴覚障害者のための社会資源の知識
②少ない社会資源の中で支援していく力
③ネットワーク構築力
④情報を集める力

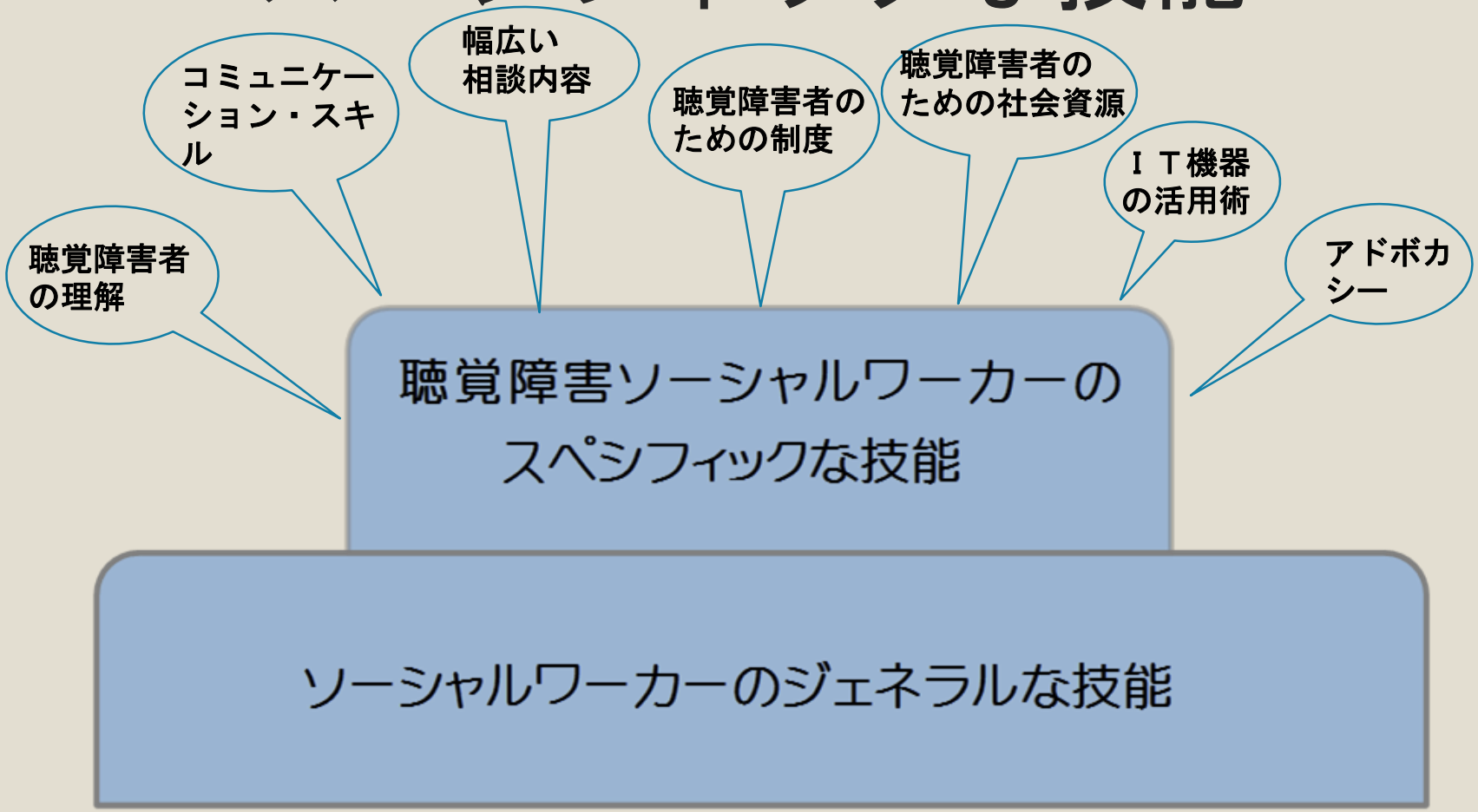
(6)【IT機器の活用術】

①IT機器を相談援助に活用できる力

（7）【聴覚障害に関するアドボカシー】

①聴者に聴覚障害者を啓発していく力
②聴覚障害者のストレングスを見つける力
③聴者社会とろう者社会の橋渡し的役割を担う力
④ソーシャルアクションができる力

聴覚障害ソーシャルワーカーのスペシフィックな技能



Ⅲ. 文化モデルアプローチの重要性

＜障害者観の変遷＞

- 医学の進歩

  聴覚病理の認知と発見　→　「聾」への医療的試みが可能となった。

＊感音性難聴の治療

＊人工内耳の埋込手術

↓

疾病モデル、病理モデル

医学モデル、欠損モデル

障害学では・・・

- 障害の医学モデル・欠損モデル・個人モデル

↓

障害の社会モデル
〃　文化モデル

障害の社会モデルとは・・・

- 障害の問題とはまず障害者が経験する社会的不利のことであり、その原因は社会にあるとする、障害者解放の理論的枠組みである。

星加良司（2007）

障害の文化モデルとは・・・

- デフコミュニティのメンバーは、共有の歴史、認識傾向、共通の習慣、共通の感覚、日本手話で構成される「ろう文化」をもつ。

- 病理的視点　⇒　文化的視点

＜ろう文化の例＞その１

- 人や物を指すときに指差しで示す。
  二人称であっても、指差しをする。
- 人を呼ぶときに電気をつけたり、消したりする。または、テーブルを軽くたたいたり、床をどんどん踏み鳴らす（振動で呼ぶ）。
- 話す時はアイ・コンタクトを重視する。
- 飲食店等で店員を呼ぶ際には、大きな音で手を叩くか、手をあげて大きく振る。
- （ウィキペディアより）

＜ろう文化の例＞その２

- 点滅などで知らせるドアベルやベビーシグナルの活用。
- 騒音の激しい大都市でも、離れていても手話で会話が可能である。
- 遅い時間でも知人をアポなしで訪ねる事が多い。電話が使えなかったためである。最近ではコンピュータによるテレビ電話の普及によりこの慣習に変化がある。

（ウィキペディアより）

聴覚障害ソーシャルワークにおいて

文化モデルアプローチとは・・・

聴覚障害ソーシャルワークには、多数派である聴者の聴文化に対して、少数派である聴覚障害者の＜ろう文化＞に関する視点が不可欠であり、それを基盤とする支援として「文化モデルアプローチ」が構築される。

原（2015）

- 文化モデルアプローチは、有効な支援アプローチ
- クライエントをストレングス視点で理解することが可能

例. 聴覚障害の特性を説明する時・・・

- **医学モデル・欠損モデル**で説明すると、

ネガティブ

「***聞こえないから***説明してあげてください。」

「聴覚障害者は***〇〇〇ができない***人」

- **文化モデル**で説明すると、

ポジティブ

「***聞こえない人の文化***と聞こえる人の文化に違いいがあります。」

「***手話***で話せばＯＫです。」

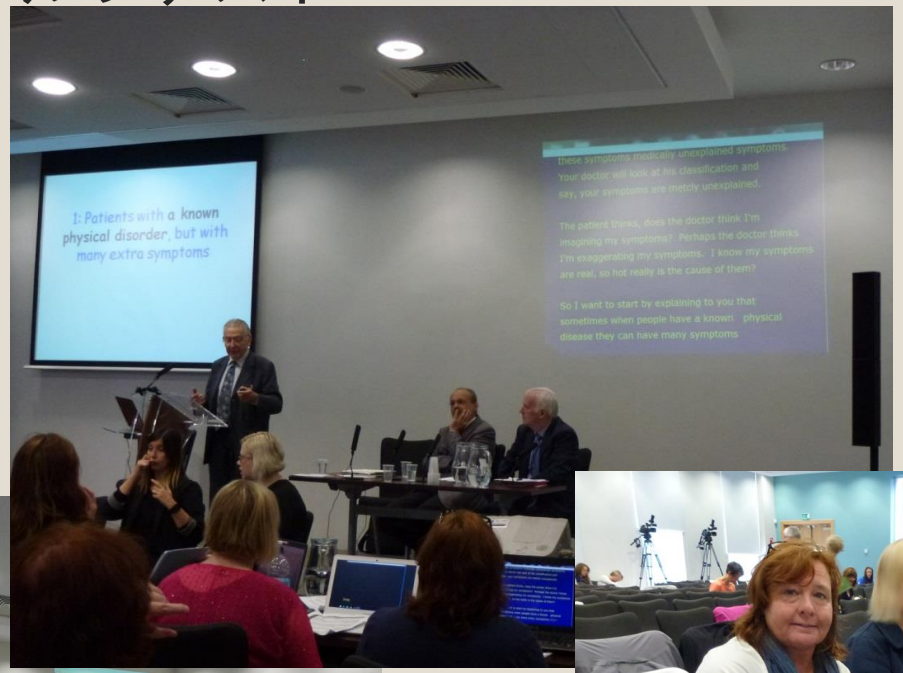
今までのまとめ

①聴覚障害者への相談支援（＝聴覚障害ソーシャルワーク）には独自の専門性が求められる。

②聴覚障害ソーシャルワーカーには、独自の７つのコンピテンスが必要である。

③文化モデルアプローチは、聴覚障害ソーシャルワークにおいてストレングス視点であり、有効な支援アプローチである。

第6回メンタルヘルスと聴覚障害世界学会
（6th World Congress on Mental Health and Deafness）
2014年9月北アイルランド、ベルファスト



Liisa Kauppinnen氏の基調講演

第6回メンタルヘルスと聴覚障害世界学会

2014（H26）年9月17日

１）「聴覚障害者にとって良いメンタルヘルスを築くには、良い社会関係づくり、良い教育、良い職場環境を作っていくことが重要であるが、依然として社会的障壁は大きい。」

２）**「聴覚障害者を医学モデルでとらえることはやめ、独自の文化をもつ文化的集団としてとらえることが重要」**

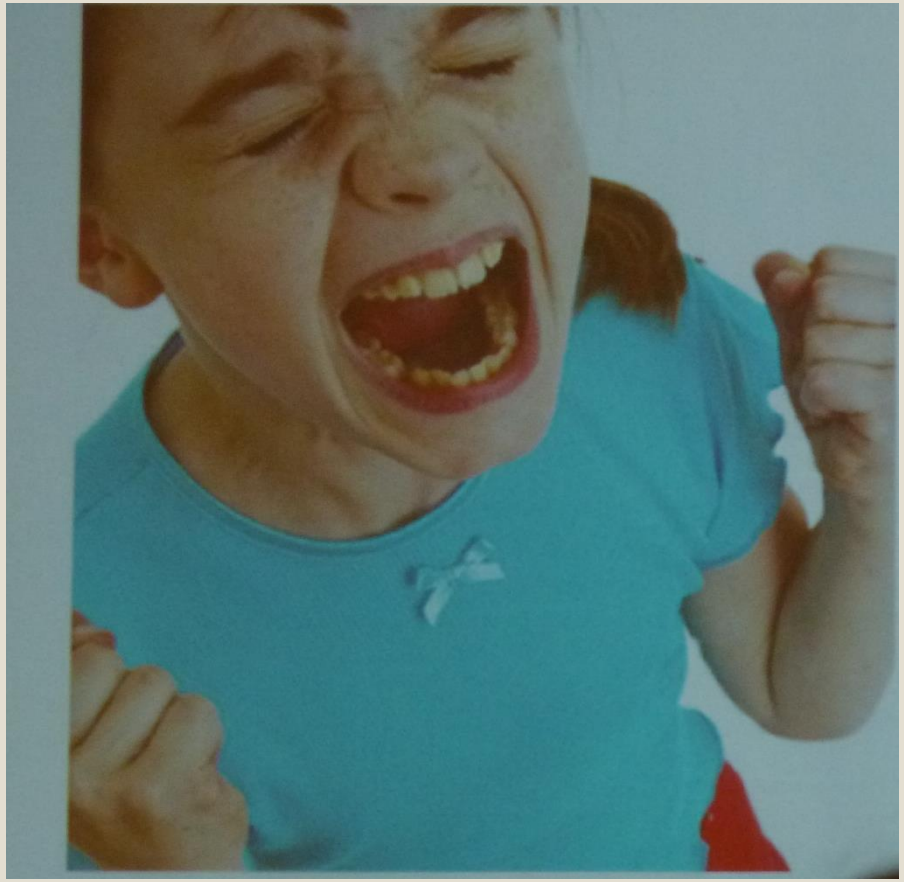
３）「ろう文化とデフコミュニティへのアイデンティティが重要」

ソーシャルワークのグローバル定義

2014年7月ＩＦＳＷ（国際ソーシャルワーカー連盟）

「ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。 この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい。」

この女の子はどうしたのでしょう？？？



思い通りにならなくて怒っている？

お腹が痛くて泣いている？

怖いものを見て泣いている？

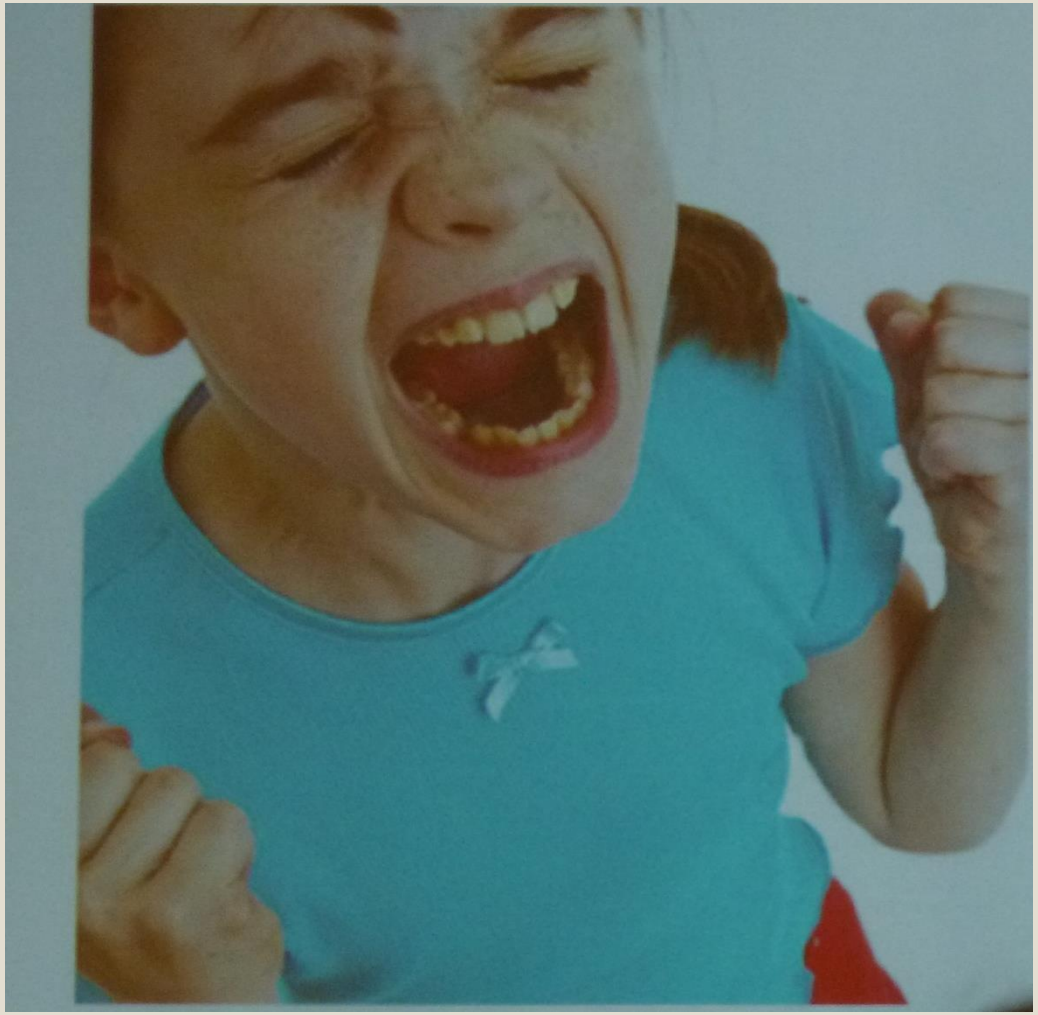
・・・・？？

？？？

相談援助で大切なこと・・・・

- 相談援助の専門知識や技術
- 自分を知ること（自己覚知）
- 対象者についての理解
（視点、まなざし）

実は、彼女は大声大会の出場者です～。



Ⅳ．アンケート調査結果（自由記述）から

① Anti-Oppressive Social Work（反抑圧的実践）

反抑圧のソーシャルワーク実践の必要性：オーディズムに関して

＊実践家は、聞こえる人が優位であるといった馬鹿げた考えを支持するオーディズムや個人、制度や難解きわまる抑圧の様相を、心に留めておくべきである。

＊オーディズムは、多くのろう者・難聴者等や、家族、コミュニティの生活の中にある（Bauman, 2004）。

② ソーシャルアクション・専門機関との連携が重要

◦「社会資源が少ない。」

⇒新たな社会資源の開発（ソーシャルアクション）

◦専門機関との連携

例：日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会

会員は手話ができる社会福祉士・精神保健福祉士

専門職団体

③ スーパービジョンの体制づくり

◦ スーパービジョンを受ける機会が少ない。

◦ ソーシャルワーカーの配置人数は少数である。

⇒スーパーバイザーが身近にいない。

＊聴覚障害者に関する先行研究が少ない。

＊今回の調査研究の報告書・論文作成を希望

文献

・Bauman,D.(2004). Audism：Exploring the metaphysics of oppression.
Journal of Deaf Studies and Deaf Education, 9(2),239-246.

・原　順子（2015）『聴覚障害者へのソーシャルワーク』明石書店.

・原　順子（2016）「聴覚障害者への相談支援における文化モデルアプローチの一考察：具体例から考察する文化モデル視点への転換」四天王寺大学紀要第62号

・原　順子（2016）「聴覚障害者の生活を支えるために必要な視点 (特集 インクルーシブな社会)」全国社会福祉協議会『月刊福祉』99巻3号

・原　順子（2017）「聴覚障害ソーシャルワークにおけるろう文化視点と文化モデルアプローチの有効性に関する考察」四天王寺大学大学院研究論集第11号

・原　順子（2017）「聴覚障害ソーシャルワークにおける文化モデルアプローチの概念研究：聴覚障害ソーシャルワーカーへのインタビュー調査分析をもとに」四天王寺大学紀要第65号

・原　順子（2018）「聴覚障害者に関する障害認識についての調査分析―手話通訳者を対象とした調査結果をもとに―」四天王寺大学大学院研究論集第12号

・原　順子（2018）「聴覚障害者のソーシャルワーク」手話通訳者必携シリーズNo.15『手話通訳者の学舎2017福祉』

・原　順子（2018）「聴覚障害ソーシャルワークとは？」日本聴力障害新聞（821）

・原　順子（2021）「障害者ソーシャルワークのカルチュラル・コンピテンスと理論的枠組みの構築に関する試案一文化モデルアプローチとインペアメント文化論との融合をもとに一」四天王寺大学紀要第69号

拙著の紹介　（明石書店）
（2800円+税）

ご清聴ありがとうございました。

本研究は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究Ｃ）により実施しています。

＊（課題番号25380811）研究代表者：原　順子

「聴覚障害者への相談支援における文化モデルアプローチの研究」

＊（課題番号17K04282）研究代表者：原　順子

「聴覚障害ソーシャルワーカーの養成プログラムに関する研究」